

むかしむかし 浦島は
助けた亀に 連れられて
竜宮城へ 来てみれば
絵にも描けない 美しさ

誰もが知る『浦島太郎』の昔話のことを歌った童謡である。この一説を読んだだけで、多くの人は海の中にある竜宮城の光景を思い浮かべることが出来るのではないだろうか。

しかしここで少し待つてほしい。浦島太郎は生身の人間である。海の中でどのように呼吸をしていたのだろうか？

昔話なのでこのような野暮な理屈をこねてはいけないのは重々承知している。しかしこのことは、日本人が海というものに対してどのような観念を持っていたのかを反映している好例ではないかと、私は考えている。

そもそも『浦島太郎』において海の中の竜宮城に行くというモチーフは当初から存在していたのだろうか？ この昔話の原型になったと考えられているのは古代の『丹後国風土記』逸文に所収された物語で、その中では、漁師がウミガメに化けていた仙女と出会い、彼女の故郷である島「蓬山」を船で訪れるという話となっている。つまりここでは海の中の世界という話にはなっていない。

中世の『御伽草子』に所収された物語になると、「竜宮城」や「玉手箱」といった『浦島太郎』の昔話の基本的な要素が出そろった。しかしこの物語でも竜宮城は海の中ではな

く海の向こうの陸地であるように描かれている。

では竜宮城が海の中にあるという描写はどのようにして出てきたのであろうか？ 近世になると、浦島太郎がウミガメの背に乗って竜宮城へ向かうというイメージが絵草子に描かれるようになって一般化したようであるが、相変わらず竜宮城は海の上にあるように描かれることが多かった。そして大正時代の絵本でようやく、竜宮城が海の中にあるという描写が認められ、昭和時代の教科書ではつきりと海の中の竜宮城の様子が描写されたことから、今日の竜宮城のイメージが完成されたようである。

しかし海の中に桃源郷があるという観念は、必ずしも新しい時代のものとは言えない。古代の『古事記』『日本書紀』の「山幸彦と海幸彦」の神話では、釣針をなくした山幸彦が、それを探す過程で海神である綿津見神の宮殿へとたどり着く。このあたりは『浦島太郎』の昔話とストーリーの構造が似ている。

この綿津見神という神であるが、神話の中では伊邪那岐命（イザナギノミコト）と伊邪那美命（イザナミノミコト）の間に生まれたことになっている。伊邪那岐命が黄泉国

しかし宗像三女神の場合、綿津見神や住吉大神とは異なり、海の中を水深に依りて治めるのではなく、陸からの距離に依りて治めていることになる。すなわち垂直的な世界観ではなく、水平的な世界観に基づいているのである。

私は、海神の役割分担における世界観の違いについて、宗像三女神の水平的なものが、綿津見神・住吉大神の垂直的なものよりも歴史的に古い様相を残しているのではないかと考えている。

世界各地の海の神話を見渡すと、いわゆる海上他界観という観念が広く見出される。例えば奄美・沖縄の地域では、海の向こうにネリヤカナヤもしくはニライカナイと呼ばれる神々が住む世界があり、死者の魂が帰っていく場所であると同時に、神々が様々な恵みを島にもたらしてくれる場所とされている。同様の観念はポリネシアにもみとめられ、海の向こうの世界はハワイキと呼ばれている。

海を生活の場とする人々にとって、海の向こうに他界があるという観念は自然なものだろう。そのため綿津見神や住吉大神も、本来は宗像三女神と同様、水平的な距離に依りて海の世界を治める神々だったのではないかと私は考えている。

しかしこうした海神の神話が、『古事記』『日本書紀』といった大きな神話に統合されていく段階で、その世界観が水平的なものから垂直的なものへと転換していったのかもしれない。

『古事記』『日本書紀』の根幹的なストーリーは、高天原の天気津神の子孫たちが、葦原の中つ国（日本列島）に降臨し、その地

価値の再発見②

浦島太郎は アクアラングを背負って 竜宮城に行ったのか？

石村 智（国立文化財機構 東京文化財研究所）

キーワード

浦島太郎、竜宮城、海神、海上他界観、垂直的世界観、
水平的世界観

を支配していた国津神たちを屈服させるという、いわゆる天孫降臨の物語である。すなわち天と地という垂直的な世界観が強調された物語である。こうした全体の世界観に合わせる形で、海神の神話も変化を余儀なくされたのかもしれない。

しかし別の考え方もある。海を生活の場とする人々にとっても、海の世界を垂直的に分割する別な論理があったのではないだろうか？ このことを解くカギは「地球は丸い」という事実である。

海の人々にとって、海のはるか向こうに存在する島の存在は、肉眼では見ることが出来ない。なぜならそれは地球が丸いからであり、水平線の向こうにある島は、文字通り水平線の下に落ちこちてしまっているのである。そして船で航海して島に近付くにつれて、最初はその島の高いところが水平線の上に姿を見せ、さらに近付くにつれて、その姿を徐々に見せ始めるのである。その様子は、あたかも島が水平線の下から浮かび上がってくるように感じられることだろう。

このように海の人々にとっては、海の向こうの遠い島は水平線より下にあるという、垂直的な世界観も共有されていたのかもしれない。つまり彼らにとって、水平的世界観（遠―中―近）と垂直的世界観（深―中―浅）は置換可能な観念であったのかもしれないのだ。

最後に以上のことを踏まえて、本論のタイトルのに解答することとしたい。浦島太郎はアクアラングなど持っていない。彼はウミガメの背に乗って、水平線の下にある竜宮城へとたどり着いたのである。

ところで日本の神話では海神は三神によつて成るといふパターンが一般的なのが、宗像三女神もその例にもれない。宗像三女神は田心姫神（タゴリヒメノカミ）、湍津姫神（タギツヒメノカミ）、市杵島姫神（イチキシマヒメノカミ）から成り、それぞれ沖ノ島にある奥津宮、大島にある中津宮、九州本島にある辺津宮に座すとされている。なお世界遺産に登録されている『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」はこの宗像三女神の祀られる場所を含んでいる。